

第 12 講 コリントスとアルゴスの場合（ノート）

コリントス

Hell. Oxy, II. 3:

「(3) 他方コリントス人のうちである人たちは政治変革を願望しており、他の人たちはラケダイモンの人々に対して敵対しているアルゴスの人々やボイオティアの人々と極めて近かったが、ティモラオスのみは彼らとは違って、個人的な苦情によりそうなったのであり、かつては最も良好な状態にあり際立ってラケダイモン鬮肩 *lakonizon* であったが、デケレイア戦争中にたまたま生じたことから理解することができるように思われる。」

Xen. *Hell.* 4. 4. 1-3

「(1) その後、その他の部隊が諸都市に向けて解散されアゲシラオスは船で故国へ帰航した。その後、アテナイ人やボイオティア人、アルゴス人や彼らの同盟諸国軍はコリントスから、ラケダイモン人と同盟諸国軍はシキュオンから出て戦った。しかしコリントスの人々は自分たちの国土が切り裂かれて常に近くにいる敵兵によって殺され、他方ではその他の同盟諸国の人々が平和な状態に有り彼らの国土を耕作しているのを目にして、彼らのうちで大多数の人々 *hoi pleistoi* や高貴な人々 *hoi beltistoi* は平和を希求し、集まってそれを議論して示した。(2) アルゴス人やアテナイ人、ボイオティア人やペルシア王からの資金に与った人たち *hoi te ton para basileos chrematon meteschemenoi*、戦争に最も責任のある者たち *hoi tou polemou aitiotatoi gegenemenoi* は平和に傾いている人たち *hoi epi ten eirenen tetrammenoi* を除去しておかなければ、再びポリスがラケダイモンの味方になる危険性があると判断し、それ故について虐殺を企てたのである。それで先ずすべての中で最も邪悪なことを企んだのであった。というのはその他の人々ならば、何人かが法により断罪されたとしても、祝祭の期間中は処刑することはなかった。彼らは、多くの者をアゴラで捕らえようとして、殺戮するためにエウクレイアの最終日を選び出したのである。(3) 彼らは指図を受けており殺戮すべき者は誰かを教示されると、

両刃の剣を引き抜き、輪になって立っている者や、座っていた者、劇場にいた者、審判人の役に従事している者を突き刺したのであった。事件が知られると、最良の人々 *hoi beltistoi* は直ちに、ある者たちはアゴラにある神々の彫像へ、ある者たちは祭壇へ逃れたのである。まさにその場所で、最も邪悪で全く法を無視する連中は、命令を下した者たちも言いくるめられていた者たちも、神殿の近くで殺戮を行ったのであった。その結果、傷付けられなかった、また法を尊重する人々のかなりの人は、冒流行為を目にして茫然自失してしまったのである。」

Diod. 14. 86. 1:

「コリントスで民主政を希求する者たちは、競技が劇場で開催されている時に、集まって殺戮を行い、都市を内乱で満たした。アルゴスの人々が無謀さの点で彼らに加勢したので、市民 120 名の喉を掻っ切り 500 名を追放したのであった。」

「民主政を希求する人たち (*tines ton epithymounton demokratias*)」

J. B. Salmon, *Wealthy Corinth: A History of the City to 338 B. C.*,
Oxford, 1984.

アルゴス :

前 418 年の寡頭派革命

「アルゴスの民主政を打ち倒そうと願っている人たち (*boulomenoi ton demon ton en Argei katalysai*: Thuc. 5. 76. 2)」

「そしてラケダイモン人とアルゴス人は、それぞれ一千名規模であったが、共同でシキュオンに遠征し、シキュオンに到着したラケダイモン人はより一層小人数の寡頭政を樹立し、その後彼らと一緒にアルゴスにおける民主政を打ち倒してラケダイモン人に都合のよい寡頭政を樹立したのだった(Thuc. 5. 81. 2)」

前 417 年の民主派革命

「そしてアルゴス人の民衆派は少しずつ集まって自信を回復し、ラケダ

イモン人たちのギュムノパイディア祭を注意深く睨んで、寡頭派に対して攻撃しかけたのであった。そして市内で戦いが戦われて民主派が勝利し、ある者たちを殺戮し、ある者たちを追放したのだった (Thuc. 5. 82. 2)」

R. A. Tomlinson, *Argos and the Argolid: From the End of the Bronze Age to the Roman Occupation*, London, 1972.

【参考文献】

D. Kagan, "Corinthian Politics and the Revolution of 392 B. C.",
Historia 11, 447-457, 1962.

J. B. Salmon, *Wealthy Corinth: A History of the City to 338 B. C.*,
Oxford, 1984.

R. A. Tomlinson, *Argos and the Argolid: From the End of the Bronze Age to the Roman Occupation*, London, 1972.